

徳島県立近代美術館

研究紀要

第12号

目次

守住勇魚に関する守住家資料について

仲田耕三

3

三宅克己の画業と生涯（二）

誕生から久松小学校時代まで

森芳功

32

守住勇魚に関する守住家資料について

仲田耕三

はじめに

当館には、平成二（一九九〇）年の設立当初に、徳島県立博物館から保管転換となった守住勇魚に関する守住家資料が所蔵されている。守住家資料は、勇魚の孫にあたる北村喜久氏をはじめ、孫の久美氏の嫁ぎ先である東条家の東条武男氏、勇魚の妻早の実家にあたる川田家の川田トヨネ氏の三者から、昭和四十六（一九七二）年に一括して徳島県博物館に寄贈された。その総数は千七百点余りで、父守住貫魚に関する絵道具、免状、名東県任免書、鑑定書、書簡、印譜集などの遺品と下絵、守住勇魚に関する絵道具、下絵目録、展覧会審査員委嘱状、名東県任命書、辞令、書簡などの遺品と、下絵、日本画、油彩画、水彩画、スケッチなどの作品、妹守住周魚に関する展覧会賞状、展覧会褒状、展覧会感謝状、鑑定書、書簡などの遺品と日本画等と多岐にわたっている。当館に保管転換となったのは、その内の守住勇魚の油彩画、水彩画、スケッチなど、五十六件五百三十点である。

今回、保管転換となったこれらの守住勇魚に関する資料を整理し、勇魚の経歴について精査するとともに、油彩画、水彩画、スケッチなどについて、制作年が明記されている作品及び制作年が推定される作品などについて述べてみたい。

徳島時代

守住勇魚は、第二回内国絵画共進会で金章を受章し帝室技芸員となるなど、明治初期の日本画壇の重鎮として高く評価されている守住貫魚の次男として、安政元（一八五四）年十一月八日、徳島富田浦掃除町（現在の徳島市中央通三丁目）に生まれている。本名は、詮之助である。現在知られている勇魚の経歴の最も古い事柄を記載している資料は、明治三十五（一九〇二）年六月に勇魚自身が記した「履歴書」（図1）であるが、この「履歴書」では、明治四（一八七二）年三月から明治五年八月まで、十六歳の時から約一年半、徳島英学校において英学、漢学、算術、図画などを学んでいたとしている。「履歴書」には、徳島英学校と記載されているが、『徳島県教育変革史』によると、当時の徳島の洋学は、明治三年十月から明治六年九月まで藩校の長久館内に設置された外国語学伝習所^②において行われており、徳島英学校とあるのは外国語学伝習所の誤記であろう。

また名東県（明治四年十一月徳島県から名東県に改称）から父貫魚に出された辞令（図2）によると、明治五年三月、父貫魚が名東県に出していた勇魚への守住家の家名の相続が許可された。長男の次郎太郎が二歳で夭折したため、勇魚が守住家の家名を継いだのである。さらに小学校からの辞令（図3）によると、勇魚はこの年の六月水練世話係を申しつけられている。小学校とは、『徳島県教育変革史』によると当時の西小学校^③であり、水泳が達者であったことがうかがえる。「履歴書」によると、勇魚はその後、明治五年九月から明治八年四月までの約三年間、父貫魚に就いて日本画を学んだ後、明治八年五月に上京しているが、この間の明治八年三月に、最初は阿波と淡路の駅路の図面記載の日雇い（図4）として、その後庶務課の雇い（図5）として名東県に雇用されていたことが解る。

この時期の勇魚の作品は、ほとんど見ることが出来ないが、慶応三（一八六七）年九月十三日の年紀が記された「鮎」（図6）が知られている。

東京、彰技堂時代

「履歴書」によると、勇魚は明治八年五月から東京麹町平河町の私塾彰技堂において画学を修めたという。

守住家の家名を継ぎながら、勇魚が何故洋画の修得を目指して上京したのかという理由については資料が無く定かではないが、浅野修三の勧めであった可能性がある。浅野は明治政府に紙幣製造の指導のため雇い入れられ、当時大蔵省紙幣寮に勤務していたイタリア人版画家エドアルド・キヨソーネのもとで本格的に凹版印刷の技術を学んだ。勇魚にとっては、義兄川田達太郎の妻の兄で、外国語伝習所の同窓でもあった。

当時の彰技堂には、西敬、浅井忠等が学んでいたが、明治九（一八七六）年十一月に工部美術学校が創立され

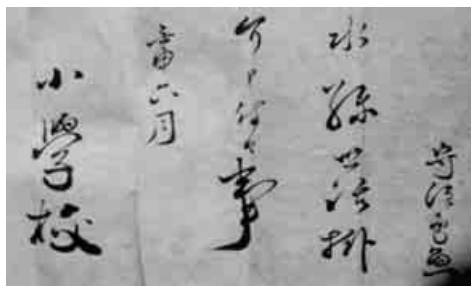


図3 小学校水練世話係辞令
明治5年6月

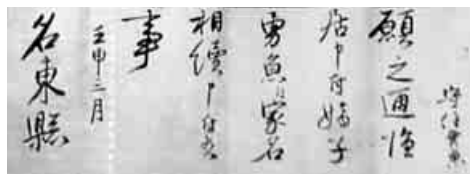


図2 家名相続辞令
明治5年3月



図1 自筆履歴書表紙
明治35年6月

ると、工部美術学校に入学している。勇魚もまた、彼等と同じ様に明治九年十一月に工部美術学校に入学したと思われる。

勇魚が、なぜ川上冬崖の聴香読画館(明治二年創設)、高橋由一の天絵社(明治六年創設)等の当時の多くの私塾の中から、明治七年に国沢新九郎が創設した彰技堂を選んで入学したのかは資料が無く定かではないが、国沢の出身地が徳島の隣藩高知であったこと、国沢は帰国の翌年の明治八年に我が国最初の洋画展覧会を開催したこと、ヨーロッパに留学し本格的に洋画の技法を取得した帰朝者の画塾として先駆的であったこと、持ち帰った石膏像や画材を用いて授業を行うなど当時としては最も斬新な指導を行っていたことなどが挙げられようか。

この時期の勇魚の作品については、制作年の記載された作品を見ることは出来ないが、この時期の制作と思われる作品をひとまず掲載することとした。

東京、工部美術学校時代

明治九年十一月六日、我が国最初の官立美術学校として、工学寮美術学校(明治十年一月に工局美術校、明治十年六月に工部美術学校となる)が設立され、十一月十三日に実技を含む試験を実施。十一月二十一日には、画学・彫刻学の二課の教場が開かれ、十三日に合格した画学生が入学し授業が開始されるとともに、再度入学試験が行われている。十一月二十五日には、彫刻学の生徒に限り当分の間官費生とし、新たに四十名を募集することが許可されている。明治九年十一月に発せられた「工学寮美術学校諸規則」によると、これらの入学生は初めの六ヶ月間は「試生」扱いであり、六ヶ月後に学力に進歩のある者は入学生とするとしている⁽⁴⁾。

では勇魚の工部美術学校入学は何日であったのであろうか。「履歴書」によると、勇魚は明治十年二月一日から明治十二年四月二十日まで工部美術学校で学んだと記している。工部美術学校の生徒で明治九年十二月から工学寮の助手を務めた小山正太郎所蔵の「工部美術学校画学生徒階級表 自明治九年十一月至同十一年八月」の「明治九年十一月入校生徒室内区分」の欄の「一週三回生」の区分に守住勇魚の名前が記載されている。これらの資料を比較すると、「履歴書」は、明治三十五年とかなり後に書かれたものであり、年月日に疑問がある事項がいくつか見られること、「工部美術学校画学生徒階級表 自明治九年十一月至同十一年八月」に記載されている項目は、当時の諸記録との記載と比較して矛盾がないことから、勇魚は明治九年十一月に、工部美術学校に既に入学していたとみることが出来る。

入学試験に合格し、明治九年十一月に入学を許された画学生は、浅井忠、市川敬二郎、岡見千吉郎、金澤正次、五姓田義松、駒峰忠臣、小山正太郎、高橋源吉、千葉真楯、中丸精十郎、西敬、廣津正人、藤雅三、松岡壽、守住



図6 「鮭」
慶応3年9月13日



図5 庶務課雇辞令
明治8年3月25日

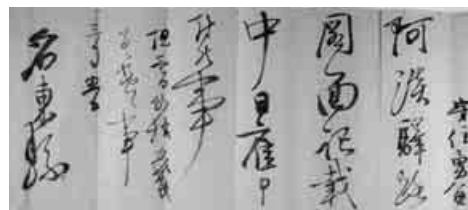


図4 阿淡駅路図面記載日雇辞令
明治8年3月5日

勇魚、山本芳翠等三十一名^⑤で、多くは入学前に私塾で洋画を学んでいた者達であった。勇魚もまた、十六歳の時から洋学を学び、彰技堂で当時の最先端の西洋画の技法に接し、明治九年九月十日に東両国中村楼で開催された書画会において、「油絵の展観ハ実に見物で仲にも横山松三郎先生の朝顔高橋由一先生の桶の仲の鯰また夏木立に虹のふいた空のけしき守住勇魚先生の函根の湖水その外玄々堂出品の山谷堀の夜景また難船を救ふ図などハ驚くやうな出来で英人ワクマンの画も三枚ありました」^⑥と評せられているように、既に高い評価を受けていたようである。五世田義松、高橋源吉、中丸精十郎、守住勇魚等の一週三回生は、工部美術学校入学以前から、既にかんりの技量に達していた者達であったと考えられる。一週三回生の規則^⑦は、女子入学の許可とともに、明治九年十二月十四日に追加されたものであるが、既に授業開始日から行われていたと思われる。勇魚の工部美術学校入学に関する資料は見る事が出来ないが、勇魚は、明治九年十一月十三日の最初の入学試験を受け、合格して十一月二十一日の授業開始日には入学していたのではなかろうか。

工部美術学校の画学教師であったアントニオ・フォンタネージの教授内容については、フォンタネージとの契約第一条に「景色・油畫・水畫・形象併繪ノ具混合・遠近畫術・畫藥調合等ノ術ヲ傳習スヘシ」と記されている^⑧。フォンタネージは、日本に赴任するにあたり、石膏像をはじめ、名画の写真、銅版画や石版画の複製品、遠近法や解剖学等の美術書、フォンタネージ自身の作品などの多くの教材と、油彩画や水彩画の絵具、木炭、コンテ、鉛筆、キャンバス、画用紙などの多くの画材を持って来た。その授業内容は、まず最初にフォンタネージ自身の作品や名画を鉛筆やコンテで模写することから始まり、次に木炭やコンテを使った石膏像の写生から人物の写生へ、その後風景の写生から人物、風景の油彩画制作となっていたようである。当時のことを松岡壽が「婦人の裸体モデルを求めることは全く不可能であるので、工部省常備の人足を裸体モデルに使用したのである、婦人のモデルとしては学校の近傍の町家の娘を説いて貴女は美しいから描きたいから来て呉れと云ふような甘言を以て連れて来て写生したものである、又野外写生用の傘や三脚など用具を以て出かけると見る人々が測量ですかと聞くやうな訳であった」^⑨と語っているが、生徒達は工部省雇いの人足や学校近くの娘をモデルにした人物写生や美術学校の近くの溜池付近や遠く郊外まで足をのばしての風景写生などを、熱心に行っていたことがうかがえる。

「工部美術学校画学生徒階級表 自明治九年十一月至同十一年八月」によると、勇魚の工部美術学校での進級過程は、明治十年四月には西敬、浅井忠、中丸精十郎、高橋源吉等とともに臨画のクラスに入り、七月には西敬、浅井忠、中丸精十郎、高橋源吉等とともに石膏人物写生へと進み、十二月には浅井忠等とともに人物写生に進級し後に油画に入るとなっている。明治十一年七月には小山正太郎、松岡壽、浅井忠、高橋源吉等とともに油画風景写生となっており、「工部省第四回年報」^⑩によると、勇魚はこの月には一週三回生から毎日出席の画学生になつていたことが解る。明治十一年七月三十日には、明治十年七月より明治十一年六月までの学科試験が行われ、勇魚は、小山正太郎、千葉真楯、松岡壽に続き第四位であり、浅井忠が第五位となっている。第一位の小山正太郎から第三位の松岡壽までが、進歩ノ賞として「油繪具 箱入付属品共」が贈られ、第四位の勇魚は賞を受け



図9 「祖谷かずら橋」
明治12年頃

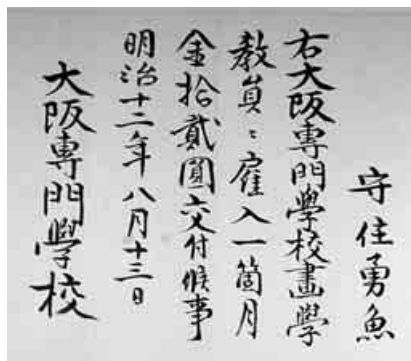


図8 大阪専門学校画学教員雇入辞令
明治12年8月13日

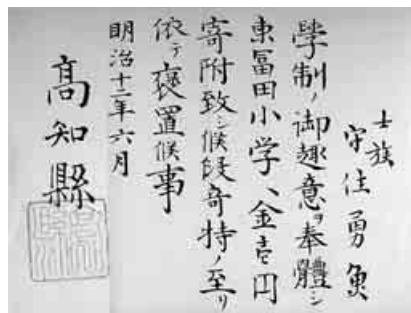


図7 東富田小学校寄付褒状
明治12年6月

られなかったが、技量の高さがうかがえよう。「工部省第三回年報」⁽¹¹⁾に付された「明治十年七月より十一年六月迄画学生進歩表」によると、勇魚は「等級一級、試験点数第四位十四点、風景人物初歩終ル、風景人物上等終ル、石膏写生終ル、風景人物油画就業中、風景人物油画写生就業中、幾何学就業中、遠近法就業中、飾画就業中、論理影法未タ、外部解剖未タ」となっており、幾何学や外部解剖などが講義されていたことが解る。

明治十一年九月三十日、工部美術学校の設立に当初から関与し、画学教室の教師を務めていたフォンタネージが工部美術学校を辞職し、故国イタリアに帰国することとなった。フォンタネージの帰国の理由は、脚氣を患ったということであったが、周知のとおり本当の理由は、フォンタネージが計画していた工部美術学校の新築計画が西南戦争のために延期になったからであったと思われる。明治十一年十月一日、フォンタネージの後任としてプロスペロ・フェレッチが任命されるが、勇魚は小山正太郎、浅井忠、松岡壽等とともにフェレッチを嫌って学校当局に更迭を申し込むが受入れられず、明治十一年十月十五日、浅井忠、松岡壽、千葉真楯、高橋源吉、西敬等とともに退学願いを提出し、十月十九日に工部美術学校を連袂退学することとなった⁽¹²⁾。

工部美術学校を退学した勇魚は、明治十一年十月二十九日に工部美術学校を退学した小山正太郎⁽¹³⁾や連袂退学した浅井忠、松岡壽、千葉真楯、高橋源吉、西敬等とともに、明治十一年十月頃、十一会を結成している。十一会については、小山正太郎の「履歴略」⁽¹⁴⁾に「冬十月。生徒等相謀。欲建一社相集研究画学。ト居于今川坊第二街。余与駒嶺忠臣先行寓焉。十一月浅井忠携其母来寓。社員遂日集会者十二人。松岡壽。高橋源吉。西敬。日下部美余二。駒嶺忠臣。浅井忠。千葉真楯。市川敬二郎。山口彦二郎。正田敬造。守住勇魚。望月俊稜。」と記載されている。明治十一年十一月付けの「社則」には、勇魚の名前が見あたらないが⁽¹⁵⁾、この頃には既に徳島に帰郷していたのではなかろうか。

この時期勇魚は、工部美術学校入学の直前の明治九年十一月七日、二十一歳で母の姪の川田早と結婚している。守住家の跡取りとして、父貫魚達が東京での生活を心配してのことであったのであろうか。明治十年九月十四日、長男彦魚が誕生しているが、残念ながら翌年の七月二十三日に夭折している。工部美術学校連袂退学の約三ヶ月前の出来事であり、徳島への帰郷を促した出来事の一つであったと思われる。

この時期の勇魚の作品については、制作年の記載された作品を三点見ることが出来る。一つは、雄のライオンを鉛筆で描いたものであり、「明治十年九月廿五日 於博物館写之」というサインから、明治十年九月二十五日に博物館（現在の東京国立博物館）で写生したことが解る。この頃の博物館は、上野ではなく内山下町（現在の千代田区内幸町一丁目）にあったが、工部美術学校があった虎ノ門からは近く、郊外写生に向いていたのである。次に、「明治十 十月四日写生」というサインが記された風景画があり、画面中央には民家が、その前の水辺で魚釣りをしていると思われる人物が三人描かれており、このスケッチもまた郊外写生の授業で描かれたものであるうか。最後に、「明治十一年 五月廿九日写生」というサインが記された風景画があり、空に浮かぶ雲が描かれている。

この時期の制作と思われる作品は、人物写生スケッチ、動物写生スケッチ、風景写生スケッチなどが見られ

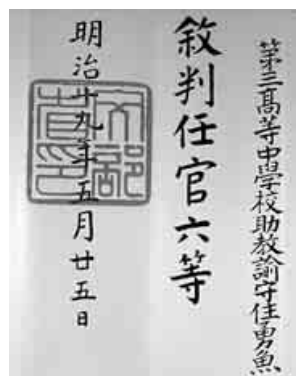


図13 第三高等中学校
助教諭任官辞令
明治19年5月25日

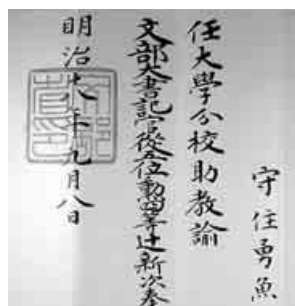


図12 大学分校助教諭任命辞令
明治18年9月8日

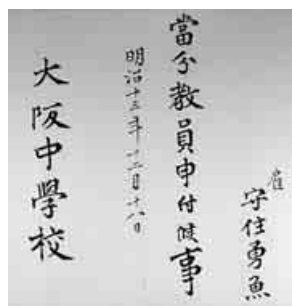


図11 大阪中学校教員申付辞令
明治13年12月18日



図10 「阿波国齋田浦塩焼」
明治12年頃

る。

人物写生スケッチとしては、工部美術学校の画学教場などを描いたもの、工部美術学校の生徒をモデルとしたもの、工部省雇いの人夫などをモデルとしたものなどが見られる。

動物写生スケッチとしては、馬、犬、羊などが題材として描かれている。浅井忠が明治十年に「豚小屋」(東京藝術大学蔵)を描いているが、勇魚には羊小屋を描いた作品が見られる。

風景写生スケッチとしては、地名が明記されているものとして溜池、牛込八幡町八幡神社、逆井之渡、池上本門寺、ツクダシマノアサなどがあり、これらは郊外写生などで描かれたものと思われ、図柄から工部大学校を描いた作品も見られる。また、小山正太郎や浅井忠も描いた鍛冶橋とよく似た図柄の鍛冶橋の風景や、東京藝術大学が所蔵している「風景」とよく似た作品も見られ、他に郊外にスケッチに行き描かれたと思われる作品が三十点程度見られる。

これらの作品については、今後浅井忠、松岡壽ら工部美術学校の他の生徒達の作品との比較検討が必要であろう。

大阪時代

明治十二(一八七九)年六月、勇魚は徳島市の東富田小学校(自宅の近く)に金一円を寄付し、高知県(明治九年名東県が高知県に合併)から褒状が出されている(図7)。この資料から、この頃勇魚は故郷の徳島に帰っていたことがうかがえる。勇魚の徳島滞在期間は資料が無く定かではないが、明治十一年七月二十三日に長男彦魚が夭折したこともあり、工部美術学校を退学してすぐの明治十一年十一月頃には徳島に帰郷し、明治十二年八月十三日に大阪専門学校の画学教員となつて(図8)、大阪に転居するまでの期間と思われる。現在、徳島滞在中に描かれたと思われる徳島県三好市西祖谷山村の祖谷のかずら橋や徳島県鳴門市の塩田を描いた作品などが数点残されている(図9・10)。

大阪専門学校は、明治十二年四月に大阪英語学校が改称された学校であり、その後、明治十三年十二月に大阪中学校、明治十八年七月に大学分校、明治十九年四月に第三高等中学校、明治二十七年六月に第三高等学校、明治三十年六月に京都帝国大学へと変遷している。大阪専門学校の変遷に伴い勇魚は、明治十三年十二月十八日に大阪中学校の教員となり(図11)、その後、明治十八年九月八日に大学分校助教諭(図12)、明治十九年五月二十五日に第三高等中学校助教諭(図13)、明治二十八年七月十三日に第三高等学校助教諭となつている(図14)。明治二十二年(一八八九)年八月、第三高等中学校の本部が大阪市東区(現在は中央区)から京都市上京区(現在は左京区)に移転。勇魚もまた第三高等中学校の京都移転に伴い京都市に転居したと思われるが、明治二十二



図17 大成普通画学本表紙
明治15年10月

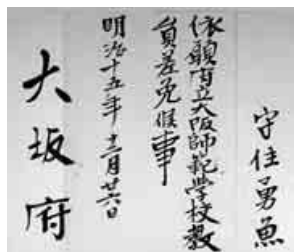


図16 大阪師範学校
教員依願差免辞令
明治15年12月26日

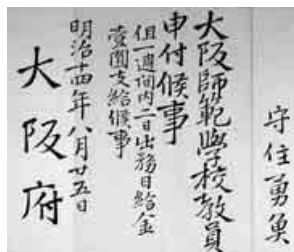


図15 大阪師範学校
教員申付辞令
明治14年8月25日

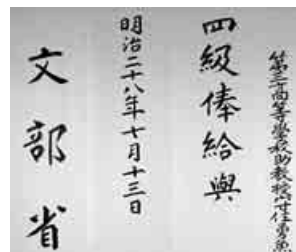


図14 第三高等学校
助教諭俸給辞令
明治28年7月13日

年四月に長女クニが京都師範学校附属小学校に入学していることから、この頃までには京都に転居したと思われる。勇魚はまた、明治十四年八月二十五日から明治十五年十二月二十六日までの一年四ヶ月、大阪師範学校に一週間に二日勤務し、大阪師範学校の非常勤講師も務めていたことが解る(図15・16)。

勇魚が明治十二年に大阪に転居した翌年頃、父貫魚もまた徳島富田浦の八幡神社の神官を辞して大阪に転居、勇魚が住んでいたと思われる大阪市東区高麗橋通りに居を構え、明治十五年十月に東京上野公園で開催された第一回内国絵画共進会で銅章を受章、明治十七年四月に開催された第二回内国絵画共進会で金章を受章、この年の七月には大阪東区道修寺町に浪華画学校を設立、明治二十三年十月帝室技芸員に任命されるなど活躍している。

明治十五年十月二十一日、長女クニが誕生。この年の十月に大阪の三友舎から『大成普通画学本二編第十二』等の教科書を上梓しているが(図17)、この本に記載された住所によりこの頃大阪府東区内淡路町一丁目四番地に住んでいたことが解る。明治十六年三月十六日、勇魚は第三高等中学校の生徒と共に、大和月ノ瀬地方に兵式修学旅行に行き、その時の様子をスケッチに残している(図18)。また明治十八年三月十二日付で中学校師範学校図画科の教員免許を取得し(図19)、この年の十二月五日には大阪府下の洪水被害に救済金を寄付し、大阪府知事から感謝状が贈られている。勇魚は、図画教員の他にも大学分校では寄宿係(図20)を、第三高等中学校では舎監(図21)や物品監守主任なども務めている。明治二十年九月三日、母カジが死去、享年七十二歳であった。また、翌年の十二月二十三日に次女のユキが誕生しているが、翌々日には亡くなっている。

この時期の勇魚の作品については、制作年の記載された作品を十四点見ることが出来る。住吉大社、鯉江川、西今里村八剱神社などの比較的自宅から近い場所の風景画や比良山大津石場、有馬鼓が瀧、奈良の下市村吉野川などの大阪周辺の風景画、牛や人物のスケッチ、彼岸花や芙蓉、桜などの花のスケッチなどがみられる。一番古い年紀の記載された作品は「明治十二年九月七日写ス」というサインを持つ住吉大社を描いた水彩画である。大阪市住吉区住吉にある住吉大社の社が堅実な技法で色鮮やかに描かれている。「大阪府下 明治十二年十月十六日 守住勇魚 模写」というサインがある風景画も見られる。鯉江川は、現在は埋め立てられて道路になっているが、寝屋川とほぼ並行に流れ、天満橋の上手で大川に合流し、古くは野崎参りの船が通っていた。「大阪府下 西成郡西今里村打 八剱神社十三年十月生」というサインがある八剱神社は、画面に書かれた住所から現在大阪市城東区鳴野東に位置する八剱神社を描いたものであり、当時の様子が偲ばれる。明治十五年八月に描かれた有馬鼓が瀧は、江戸時代に「有馬六景」に数えられ、瀧壺に落ちる音が鼓のようであったことから鼓が瀧と名付けられたとのであるが、瀧壺に流れ落ちる瀧の姿が臨場感豊かに描かれている。

この時期の制作と思われる作品は、天満橋をはじめ安治川、飛鳥山、四天王寺、新喜多新田などの近郊の風景画や牛のスケッチなどが見られる。天満橋は、勇魚が住んでいた東区高麗橋通りにほど近く、堅実な技法で色鮮やかに描かれている。安治川は旧の淀川で、淀屋橋から中之島を経由し大阪湾に流れているが、船が行き来している当時の姿が偲ばれる。飛鳥山は、東京都北区王子の飛鳥山公園もよく知られているが、ここに描かれ

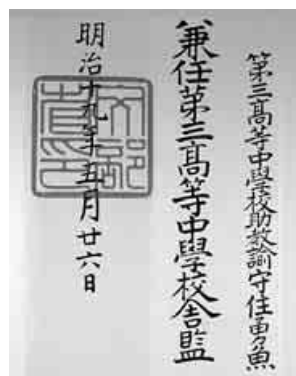


図21 第三高等学校
舎監兼任辞令
明治19年5月26日

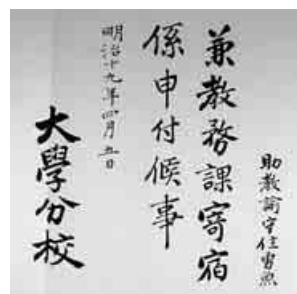


図20 大学分校寄宿係兼任辞令
明治19年4月5日



図19 中学校師範学校
図画科教員免許状
明治18年3月12日



図18 第三高等学校
修学旅行日記表紙
明治16年3月26日

ている飛鳥山は、サイン等の筆跡などから大阪府堺市北区百舌鳥綾南町にある飛鳥山を描いたものと思われる。堅実な技法で色鮮やかに描かれた寺院は、中門、塔、金堂が一直線に描かれていることから四天王寺式伽藍配置であることが解り、大阪の古刹の四天王寺が描かれていることが解る。若江郡新喜多新田というサインがある風景画は、現在の東大阪市長栄寺、かつての布施市高井田村を描いたものであるが、明治二十二年に新喜多新田が合併されて高井田村となっていたことから、この風景画は明治二十二年までに描かれていたと推測される。大阪朝日新聞と冊子を描いた水彩画もこの時期の作品と思われる。「Morizumi」とサインされている牛のスケッチは、「明治十二年 十月三日 写生 IMJ」のサインがある牛のスケッチの裏面に描かれており、ほぼ同時期に描かれたものであろう。

京都時代

勇魚は、第三高等中学校の京都移転に伴い、明治二十二年四月頃までに京都に転居したと思われるが、明治二十五年二月二十六日、父貫魚が大阪市東区谷町の自宅で死去、享年八十二歳であった。

明治二十六年八月、勇魚は京都美術協会の会員となり(図22)、翌年四月四日には京都市工芸品展覧会の審査員を委嘱されている(図23)。その後も、明治三十二年四月二十日には新古美術品展覧会の審査員を委嘱され(図24)、明治三十五年二月六日には第五回内国勸業博覧会の出品委員となるなど(図25)、画壇においても高い評価を受けている。

明治二十八年七月十三日、勇魚は第三高等学校の助教となるが、同年八月十七日には第三高等学校を非職となり(図26)、翌年十月十六日、第三高等学校を退職している(図27)。勇魚は、第三高等学校を非職となった翌月の明治二十八年九月、同志社理科学学校等の画学教員に迎えられ(図28)、明治三十六年十二月一日には同志社普通学校講師、明治四十三年四月一日には同志社普通学校教師となり、大正四年十一月十二日には同志社社長より感謝状(図29)と記念品の「碁笥一対」が贈られ、大正六年三月二十六日に同志社を辞職している(図30)。同志社の在職期間は約二十二年の長きにわたっているが、同志社に勤務していた頃に使用されたと思われる画手本の一部が残されている。その一つは、表面右隅に「Collins Advanced Drawing Book No15」と印刷されており、裏面に「同志社波里須理科学学校蔵書之印」という印が押されていることから、同志社理科学学校の画学教員時代に使用されていたと思われる(図31)。もう一点「Collins Advanced Drawing Book No13」と印刷されている画手本があるが(図32)、これらの画手本は、イギリスのコリンズ社が出版した画手本の一部であることが解る。勇魚はまた、明治三十年四月に第三高等学校に大学予科が設置されると、明治三十年八月三十一日から明治三十二年七月十三日までの約二年間、第三高等学校大学予科図画科嘱託講師を務め(図33・34)、明治三十七年九

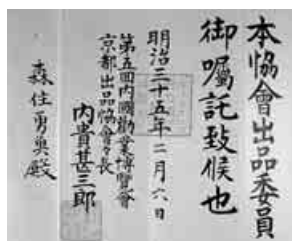


図25 第五回内国勸業博覧会
出品委員委嘱状
明治35年2月6日

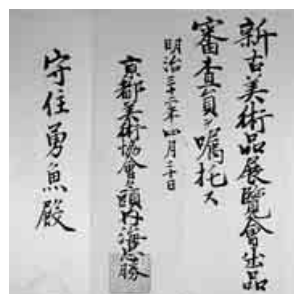


図24 新古美術品展覧会
審査員委嘱状
明治32年4月20日

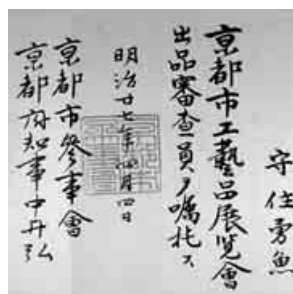


図23 京都市工芸品展覧会
審査員委嘱状
明治27年4月4日



図22 京都美術協會員證
明治26年8月

月十六日から十二月二十六日まで短期間であるが京都高等工藝学校雇いとなっている(図35・36)。

勇魚はまたいくつか寄付をしているが、主なものとしては明治四十二年六月十八日にイタリア南部の震災に對しての被害者救恤金寄付の京都市長からの感謝状、大正十五年四月十三日に衣笠尋常高等小学校に校舎建築費を寄付した同校からの感謝状などがある。

勇魚は、大阪時代から京都時代にかけて持ち家を持たず借家住まいであったが度々転居をしていたようである。封書や公文書などにより判明している住所をみると、明治二十九年十一月二十七日には京都市上京区出町上る青龍町五十五番戸、明治三十年六月一日には京都市上京区出町通今出川上る、明治三十五年六月には京都市上京区寺町通り今出川下る真如堂前町三十番戸、明治三十七年六月には京都市上京区中筋通石薬師下ル新夷町、大正七年十一月二十二日には京都市上京区今出川一丁目同志社前、大正十一年四月二十四日には京都市北野紅梅町住友邸西裏となっている。

明治二十五年二月二十日に父貫魚が亡くなった後、勇魚は本格的に日本画を描き始め、明治三十五年六月に記された「履歷書」によると、「明治二十八年 某ノ嘱ニ依リ 宮内省御用品綴織下画トシテ富士巻狩ノ図」二幅(各縦七尺巾一丈三尺)ヲ今尾景年と合作ス」と記されており、明治二十八年に川島甚兵衛の依頼により、宮内省御用品の綴織の下画として、「富士巻狩ノ図」二幅を今尾景年(一八四五～一九二四)と合作したことが解る。「富士巻狩ノ図」は、縦が212.1cm、巾が394.3cmの大作であった。

「履歷書」にはまた「全廿九年 右同人の嘱ニ依リ 文武器具虫干ノ図」二幅(各縦五尺巾一丈二尺)ヲ作ル其武具図ハ綴織トシ天覧の栄ヲ賜ヒ後チ佛國博覽會ニ出品シ携帰後宮内省御用品トナル」とあり、翌年も川島甚兵衛の依頼により、「文具虫干図」「文具虫干図」の二点を制作している。「文具虫干図」「文具虫干図」の二点もまた縦が151.5cm、巾が363.6cmの大作であったが、「文具虫干図」の綴織は天覧となった後、明治三十三年のパリの万国博覧会に出品され、宮内省御用品となった後、大正十一年四月イギリス皇太子来日のおり、イギリス王室に寄贈されている。「文具虫干図」もまた綴織にして宮内省に納められたが、大正十年皇太子がイギリスに外遊のおり、イギリス皇室に寄贈されている。「文具虫干図」「文具虫干図」の綴織がイギリス王室に贈られたことに關して、大正十一年四月三十日付の川島甚兵衛から勇魚に贈られた書簡が残されているが、「肅啓、時下春暖之好期ニ御座候処先生愈御清輝奉慶賀候。陣ハ御揮毫相願候文具並ニ武具虫干之双図、弊所ニ於テ綴織ニ製作之上納仕置被遊候哉ニ拝聞仕リ、弊所之面目不過之、且ハ先生之御名譽ニ対シ誠ニ御同慶之至ニ堪候。茲ニ謹而御厚礼申上、尚尊体之御健康ヲ奉祈上候。敬具。大正十一年四月三十日、川島甚兵衛、守住勇魚侍史」と記され、川島甚兵衛と勇魚の親交の深さがうかがえる。

「履歷書」にはさらに「全三十三年 右同人の嘱ニ依リ 豊明殿御欄間用織物下画トシテ油画ニテ菊桐ノ図ヲ作ル」全三十五年 右同人の嘱ニ依リ 油画ニテ蒙古襲来菊池次郎激戦ノ図一幅(縦一丈巾九尺)作ル」と記されており、川島甚兵衛の依頼により、明治三十三年に宮中豊明殿の欄間用織物の下絵として油彩画の「菊桐ノ図」を



図29 同志社普通学校感謝状
大正4年11月12日



図28 同志社理科学校等
画学教員委嘱状
明治28年9月



図27 第三高等学校
助教授依願免官辞令
明治29年10月16日

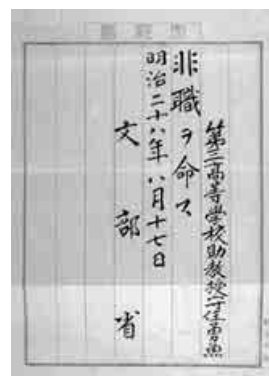


図26 第三高等学校
助教授非職辞令
明治28年8月17日

描いたことが解る。また、明治三十五年に油彩画「蒙古襲来菊池次郎激戦ノ図」を、川島甚兵衛の依頼により綴織の下図として制作しているが、縦が30cm、巾が22cmの大作であった。

明治三十七年六月、勇魚は作品の頒布会を立ち上げている。その時の趣旨書⁽⁶⁾には次のように述べられている。

「今や大和絵の筆者甚鮮なく就中我住吉派に於て最も然りとす 彼の有識古実の研鑽のごときは我派の特色とも謂ふべきもの之を斯界に喪はんこと甚惜むべし 不肖幼より教を先考に受けたれば斯道のため奮起せんこと従来先輩良友の勸むる処となりしも 身教鞭を執れる為其余暇無く空しく今日に至れり 然るに近時幸いに閑を得たれば 拙技素より其任にあらずと雖ども 励精一番其好意に副はんが為め 茲に一會を設けて拙画を頒たんとす 知友諸彦幸に御賛助御加名あらんことを希ふ 敬白 明治三十七年六月 会主 住吉勇魚 幹事 伏原利造 原田吉次郎 堤中卯之助」

「故画伯貫魚守住翁の世にあるや 出ては山水風光の真美を写し 入りては歴史の有識古実を究め 其材料は積て数千の多きに至れり 往年金印恩賜あり 尋で帝室技芸員の栄光を荷はれたる亦偶然にあらざるなり 息勇魚君幼より業を家翁に学び 其家流の蘊奥を極られる されども 拾有余年公職の為め精画少く 人をして遺憾惜く能はざらしむ 近時漸く閑あるを得 有志の勧誘を納れ先考の遺志を継がんとす 予輩夙に先翁と交誼あり 今又勇魚君を見る 自から旧懐の思に堪へざるあり 乞ふ我国精華の粹たる大和風を得んとする諸彦奮て入会のあらんことを希ふ」

賛助員には今尾景年、小山三造、竹内栖鳳、巨勢小石、浅井忠などの名前が見受けられる。会の内容は、明治三十七年六月から翌年八月までの十五ヶ月を会期とし、会費は月八十銭、月毎に百二十の画題画の中から抽選が行われ、満期までに各々絹本の日本画一点を得ることが出来る。また満期にはこれらの日本画の展覧会を開催し、抽選で勇魚の日本画が当たるとのことであった。貫魚からの住吉派の継承は妹の周魚が引き継いでいたが、勇魚は父貫魚の遺志を継いで多くの住吉派の日本画を描き、妹周魚になり代わって実質的に住吉派を継承して行ったことがうかがわれる。

大正期の勇魚の主な作品としては、大正元年に描かれた油彩画の大作「富士巻狩図」、大正五年に描かれた大作の「湊川合戦図」、この頃に描かれたと推測される大作の「木蓮孔雀図」、油彩画の大作「松に鶴図」などがあるが、これらの作品もすべて川島甚兵衛の依頼に依るものであった。

大正十二年六月二十七日、一つ歳下であった妻早が死去、享年六十七歳であった。昭和二(一九二七)年三月四日、勇魚が死去。晩年に喘息を患っていたが、昭和二年一月中旬に急性気管支炎を発病、享年七十二歳であった。昭和二年四月十五日発行の「同志社校友同窓会報 第八号」に、友人の牧野信が「住吉派の画系は翁を以て其跡を絶つ、実に浩嘆の至りなり。冀くば今の中に翁の蔵書及稿本等を検討して、之が再興を謀る篤志の美術家出でんことを。昭和二年三月六日、京都市北野紅梅町に於て、神式を以て葬儀となし、蓮華谷に火葬し真如堂に埋む。」と記している。



図33 第三高等学校大学予科
図画科嘱託講師任官辞令
明治30年8月31日



図32 コリンズ社出版画手本



図31 コリンズ社出版画手本

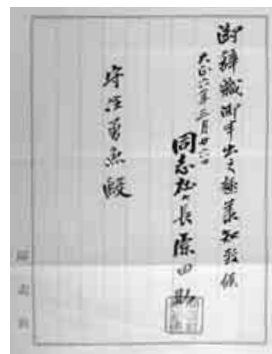


図30 同志社辞職申出受理書
大正6年3月26日

京都時代の勇魚の作品については、制作年の記載された作品を七点見ることが出来る。「キノコ」は、松茸を素材に描いたもので、鉛筆で堅実に描かれている。「鮎」は、スケッチ帳に描かれている一点である。画面右上に「観正寺川産 鮎ノ大サ及ヒ其廻リ図ノ如シ」というサインがあり、鮎の部位の寸法が細かく書かれている。勇魚は魚釣りが大変好きであったとのことであるが、この鮎もまた観正寺川での釣果の一匹であろう。このスケッチ帳は、狩猟に関することが主に描かれているが、最後の頁に、「明治廿八年十一月廿日ヨリ 吉田氏の法ニ倣ヒ 左ノ如ク改ム」と記され、火薬の配合が書かれていることから、明治二十七年から翌年にかけて描かれたものと思われる。「福寿草」「蕨」「白藤」「蟬脱殻」「木蓮」の五点は同じスケッチ帳に描かれている。その内の「福寿草」と「蕨」は色鮮やかな水彩で堅実に描かれており、画面に福寿草と蕨に関する観察が細かく書かれている。このスケッチ帳は、主に植物が描かれているが、明治四十三年から大正七年にかけて描かれたものであろう。

京都時代の制作と思われる作品としては、「本のある静物」が挙げられよう。この作品は、豪華に装幀された本の上に金蓮花（ナスタチウム）が置かれた構図で、紙に描かれた油彩画であるが、浅井忠の水彩画「本と花」（図37）と全く同図柄であることが解った。前述のとおり勇魚と浅井は彰技堂で共に学び、共に工部美術学校に進学し、共に工部美術学校を退学して十一会を結成した間柄であり、工部美出学校退学後も親交があっても不思議ではないが、これまでそれを裏付ける資料がなかった。浅井の「本と花」は、水彩画のため色合いは少し鮮やかであるが、勇魚の「本のある静物」と構図、色彩の配置、寸法などがほとんど一致しており、「JUNE 1889」というサインから、明治二十二年（一八八九）年六月の制作であることが解る。明治二十二年は、浅井忠や松岡壽らにより明治美術会が設立され、第一回展が開催された記念すべき年であり、東京美術学校が開設された年でもあった。この年、勇魚は京都に居て、第三高等中学校の図画教員であったが、上京して浅井と共に「本のある静物」を描いたのか、それとも浅井が京都に来て勇魚と共に「本と花」を描いたのかは定かではないが、勇魚の「本のある静物」もまた浅井の「本と花」と同じ時期の明治二十二年頃に描かれたものと思われる。

おわりに

最後に勇魚の油彩画について少し触れておきたい。現在、当館所蔵の守住家資料における勇魚の油彩画としては、九点挙げることができる。勇魚は、油彩画を描くにあたっては、画材としてキャンバスを使用せず、すべてが紙に描かれていたためその保存状態はあまり良くなく、当館の油彩画も近年修復を行っている。川島甚兵衛からの依頼により描かれた油彩画もほとんどが紙に描かれていたため劣化が激しかったとのことであり、作品を残すという観点からすると、勇魚の油彩画は致命的な欠陥を持っていたと言えよう。このことから、勇魚の油彩画は現存するものが少ない。また、川島甚兵衛からの依頼により描かれた作品は、ほとんどが綴織の



図37 浅井忠「本と花」
明治22年



図36 京都高等工芸学校
雇解任辞令
明治37年12月26日



図35 京都高等工芸学校
雇辞令
明治37年9月16日



図34 第三高等学校大学予科
図画科嘱託講師免官辞令
明治32年7月13日

下画として制作され発表されることがなかったため、画壇に真価を問う機会を失っていたと言える。

現在当館に所蔵されている油彩画九点は、絵具、紙の材質、構図などから検討すると、その制作時期を二期に分けることが出来ると思われる。まず「家のある風景」「木蓮」「牡丹と木蓮」「牡丹」「薔薇」などの作品の制作時期は、絵具、紙の材質、構図などから明治期の初期、工部美術学校時代に近い頃の制作と思われる。「急須」「急須と湯呑」「薔薇と魚」などの作品は、絵具、紙の材質などから「本のある静物」が制作されたと思われる明治二十二年頃の制作ではなからうか。

なかた こうぞう(徳島県立近代美術館専門学芸員)

註

- (1) 『守住家資料目録』徳島県博物館所蔵資料目録第十三号 昭和五十九年三月
- (2) 『徳島県教育変革史』徳島県教育会 大正九年十一月二二六頁
- (3) 『徳島県教育変革史』(前掲書) 二四頁
- (4) 大蔵省編纂『明治前期財政經濟史料集成第十七卷』昭和六年九月三四五頁
- (5) 尾崎尚文『フォンタネージと日本の近代美術展図録』東京都庭園美術館 平成九年十月一五八頁 一五九頁
- (6) 川崎智子『来日西洋人と幕末・明治前期の書画』『近代画説19』明治美術学会 平成十二年十二月三九頁
- (7) 隈元謙次郎『明治初期來朝伊太利亞美術家の研究』八潮書店 昭和十五年十一月二五頁
- (8) 隈元謙次郎『明治初期來朝伊太利亞美術家の研究』(前掲書) 一一頁
- (9) 『美術』第九卷第八號 昭和九年八月六頁
- (10) 尾崎尚文『工部美術学校史 工部省第四回年報』『フォンタネージと日本の近代美術展図録』東京都庭園美術館 平成九年十月一四三頁
- (11) 尾崎尚文『工部美術学校史 工部省第四回年報』『フォンタネージと日本の近代美術展図録』東京都庭園美術館 平成九年十月一五四頁
- (12) 尾崎尚文『工部美術学校史 工部省第四回年報』『フォンタネージと日本の近代美術展図録』東京都庭園美術館 平成九年十月一四四頁
- (13) 尾崎尚文『工部美術学校史 工部省第四回年報』『フォンタネージと日本の近代美術展図録』東京都庭園美術館 平成九年十月一四三頁 一四四頁
- (14) 金子一夫『小山正太郎評伝 在長岡時代から明治十五年まで』『近代画説2』明治美術学会 平成五年十二月二九頁
- (15) 金子一夫『近代日本美術教育の研究 明治時代』中央公論美術出版 平成四年二月一二四頁 一二五頁
- (16) 『守住家資料目録』徳島県博物館所蔵資料目録第十三号 昭和五十九年三月二六頁

彰技堂時代に制作されたと推定される作品



3. 「人物」
1875～76年頃
鉛筆 紙 24.2×16.7cm
サイン：IM



2. 「人物」
1875～76年頃
鉛筆 紙 26.5×16.4cm
サイン：IM



1. 「風景」
1875～76年頃
水彩 紙 19.0×27.3cm
サイン：I.Morizumi



6. 「人物」
1875～76年頃
鉛筆 紙 26.4×16.3cm
サイン：IM



5. 「人物」
1875～76年頃
鉛筆 紙 23.9×16.7cm
サイン：I.Morizumi



4. 「人物」
1875～76年頃
鉛筆 紙 25.1×16.9cm



9. 「人物トレース」
1875～76年頃
鉛筆 紙 25.9×34.7cm



8. 「人物」
1875～76年頃
鉛筆 紙 22.7×16.0cm



7. 「人物」
1875～76年頃
鉛筆 紙 27.7×19.7cm



12. 「足・腕トレース」
1875～76年頃
鉛筆 紙 25.9×34.7cm



11. 「足トレース」
1875～76年頃
鉛筆 紙 25.9×34.7cm



10. 「人物トレース」
1875～76年頃
鉛筆 紙 25.9×34.7cm



15. 「動物トレース」
1875～76年頃
鉛筆 紙 25.9×34.7cm



14. 「動物トレース」
1875～76年頃
鉛筆 紙 25.9×34.7cm



13. 「馬・目トレース」
1875～76年頃
鉛筆 紙 25.9×34.7cm



18. 「人物トレース」
1875～76年頃
鉛筆 紙 25.9×34.7cm



17. 「動物トレース」
1875～76年頃
鉛筆 紙 25.9×34.7cm



16. 「動物トレース」
1875～76年頃
鉛筆 紙 25.9×34.7cm



19. 「動物・人物トレース」
1875～76年頃
鉛筆 紙 25.9×34.7cm

工部美術学校時代に制作された作品



3. 「雲」
1878年
鉛筆 紙 18.4×27.6cm
サイン：明治十一年五月廿九日写生



2. 「風景」
1877年
鉛筆 紙 24.4×32.4cm
サイン：明治十 十月四日写生

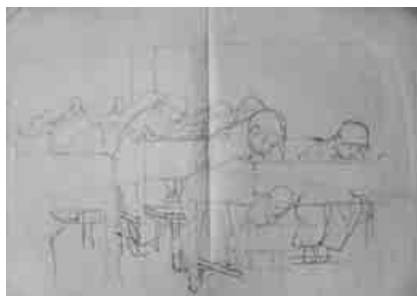


1. 「ライオン」
1877年
鉛筆 紙 13.6×19.1cm
サイン：明治十年九月廿五日
於博物館写之

工部美術学校時代に制作されたと推定される作品

○人物写生スケッチ

・工部美術学校教場などを描いた作品



3. 「工部美術学校画学教室」
1876～78年頃
鉛筆 紙 24.7×34.3cm



2. 「工部美術学校画学教場」
1876～78年頃
鉛筆 紙 19.9×29.7cm



1. 「工部美術学校画学教場」
1876～78年頃
鉛筆 紙 22.7×29.0cm



4. 「工部美術学校画学教室」
1876～78年頃
鉛筆 紙 24.7×34.4cm

・工部美術学校の生徒をモデルとした作品



3. 「人物」
1876～78年頃
鉛筆 紙 22.4×29.2cm



2. 「人物」
1876～78年頃
鉛筆 紙 19.8×27.1cm



1. 「人物二人」
1876～78年頃
鉛筆 紙、17.0×23.5cm



6. 「人物」
1876～78年頃
鉛筆 紙 28.9×22.4cm



5. 「人物」
1876～78年頃
鉛筆 紙 19.1×13.6cm



4. 「人物二人」
1876～78年頃
鉛筆 紙 25.0×34.8cm

・工部省雇いの人夫などをモデルとした作品



3. 「人物」
1876～78年頃
鉛筆 紙 18.4×28.0cm



2. 「人物二人」
1876～78年頃
鉛筆 紙 17.0×23.5cm



1. 「人物二人」
1876～78年頃
鉛筆 紙 20.9×27.2cm
サイン：IM 十四

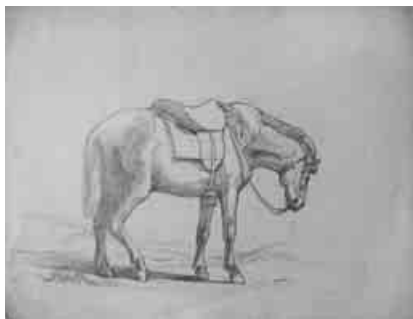


4. 「人物二人」
1876～78年頃
鉛筆 紙 20.5×28.0cm

○動物写生スケッチ



3. 「馬足」
1876～78年頃
鉛筆 紙 19.5×29.0cm



2. 「馬」
1876～78年頃
鉛筆 紙 22.5×29.0cm



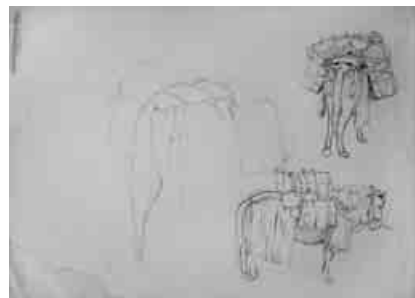
1. 「羊と犬」
1876～78年頃
水彩 紙 20.6×27.7cm
サイン：I.Morizumi



6. 「馬」
1876～78年頃
鉛筆 紙 14.0×18.0cm



5. 「馬」
1876～78年頃
鉛筆 紙 17.3×24.7cm



4. 「馬二頭」
1876～78年頃
鉛筆 紙 20.2×27.7cm



7. 「洋犬」
1876～78年頃
鉛筆 紙 17.9×24.7cm
サイン：洋犬

○風景写生スケッチ



3. 「逆井之渡」
1876～78年頃
鉛筆 紙 20.6×28.2cm
サイン：逆井之渡



2. 「八幡神社」
1876～78年頃
鉛筆 紙 21.0×29.4cm
サイン：牛込八幡町 八幡神社



1. 「溜池」
1876～78年頃
鉛筆 紙 20.7×27.8cm
サイン：LM 十月十一日写生 溜池



6. 「風景」
1876~78年頃
鉛筆 紙 18.7×14.5cm
サイン：勇魚 東京 工部美術学校時代（裏）



5. 「佃島ノ朝」
1876~78年頃
鉛筆 紙 16.8×25.2cm
サイン：ツクダシマノアサ



4. 「池上本門寺」
1876~78年頃
鉛筆 紙 20.4×30.2cm
サイン：池上本門寺



9. 「風景」
1876~78年頃
鉛筆 紙 28.4×21.8cm
サイン：IM



8. 「鍛冶橋」
1876~78年頃
鉛筆 紙 19.7×22.5cm



7. 「工部大学校」
1878年頃
鉛筆 紙 16.2×22.6cm



12. 「風景」
1876~78年頃
鉛筆 紙 15.2×21.0cm



11. 「風景」
1876~78年頃
コンテ 紙 24.3×32.6cm



10. 「風景」
1876~78年頃
鉛筆 紙 12.0×18.0cm



15. 「風景」
1876～78年頃
コンテ 紙 20.6×28.4cm



14. 「風景」
1876～78年頃
水彩 紙 17.3×26.4cm



13. 「風景」
1876～78年頃
鉛筆 紙 11.8×16.8cm



18. 「風景」
1876～78年頃
鉛筆 紙 12.6×17.9cm



17. 「風景」
1876～78年頃
鉛筆 紙 18.2×24.9cm



16. 「風景」
1876～78年頃
鉛筆 紙 16.4×22.6cm



21. 「風景」
1876～78年頃
鉛筆 紙 15.0×22.0cm



20. 「風景」
1876～78年頃
鉛筆 紙 15.0×17.8cm



19. 「風景」
1876～78年頃
鉛筆 紙 11.8×16.7cm



24. 「風景」
1876~78年頃
鉛筆 紙 17.3×25.0cm
印：母里受見



23. 「神社」
1876~78年頃
鉛筆 紙 16.7×23.4cm



22. 「神社」
1876~78年頃
鉛筆 紙 16.8×23.4cm



27. 「寺院」
1876~78年頃
鉛筆 紙 18.1×26.4cm



26. 「風景」
1876~78年頃
鉛筆 紙 13.0×16.9cm



25. 「風景」
1876~78年頃
鉛筆 紙 22.8×29.2cm



30. 「風景」
1876~78年頃
鉛筆 紙 8.5×12.2cm



29. 「風景」
1876~78年頃
鉛筆 紙 12.1×18.0cm



28. 「寺院」
1876~78年頃
鉛筆 紙 20.8×27.2cm



33. 「風景」
1876~78年頃
鉛筆 紙 18.2×14.3cm



32. 「風景」
1876~78年頃
鉛筆 紙 19.6×28.5cm



31. 「風景」
1876~78年頃
鉛筆 紙 13.3×16.2cm



36. 「風景」
1876~78年頃
鉛筆 紙 19.9×30.3cm



35. 「風景」
1876~78年頃
鉛筆 紙 17.1×23.7cm



34. 「風景」
1876~78年頃
鉛筆 紙 22.3×29.6cm



39. 「風景」
1876~78年頃
鉛筆 紙 18.9×26.8cm



38. 「風景」
1876~78年頃
鉛筆 紙 20.1×30.0cm



37. 「風景」
1876~78年頃
鉛筆 紙 15.1×20.3cm



42. 「風景」
1876~78年頃
鉛筆 紙 19.8×28.8cm



41. 「風景」
1876~78年頃
鉛筆 紙 19.7×22.8cm

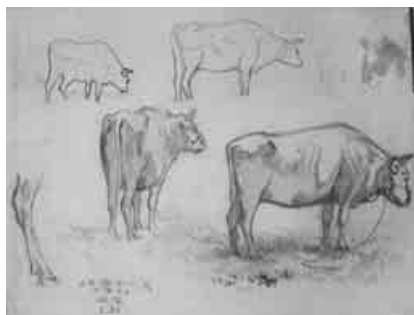


40. 「風景」
1876~78年頃
鉛筆 紙 21.5×29.1cm

大阪時代に制作された作品



3. 「牛」
1879年
鉛筆 紙 24.5×32.0cm
サイン：明治十二年十月三日 I.Morizumi
写生



2. 「牛」
1879年
鉛筆 紙 20.5×28.0cm
サイン：明治十二年 十月三日 写生 I.M.



1. 「住吉大社」
1879年
水彩 紙 22.5×29.0cm
サイン：大阪 官幣大社 住吉神社 第一
本宮 明治十二年九月十七日写
ス印 (守住)



6. 「鯉江川之夕陽」
1879年
水彩 紙 24.5×32.6cm
サイン：大阪府下鯉江川之夕陽 明治十
二年十月十六日 写生 守住勇魚



5. 「風景」
1879年
水彩 紙 24.3×32.6cm
サイン：大阪府下 明治十二年十月十六
日 守住勇魚 模写



4. 「人物」
1879年
鉛筆 紙 24.5×32.1cm
サイン：明治十二年十月三日写生 Morizumi



9. 「風景」
1880年
鉛筆 紙 21.5×30.2cm
サイン：大阪府下 東今里村 明治十三年十月写生



8. 「八剱神社」
1880年
水彩 紙 20.7×28.5cm
サイン：大阪府下 西成郡西今里村打八剱神社十三年十月生



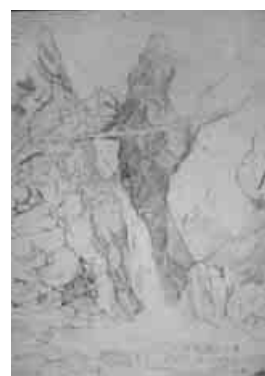
7. 「比良山大津石場」
1880年
水彩 紙 20.5×27.9cm
サイン：比良山大津石場嘉儀亭ヨリ写 明治十三年三月廿一日 I.Morizumi



12. 「芙蓉」
1882年
鉛筆 紙 24.9×34.7cm
サイン：芙蓉 明治十五年十月写



11. 「彼岸花」
1882年
水彩 紙 24.9×18.3cm
サイン：明治十五年八月廿一日写生



10. 「有馬鼓が瀧」
1882年
鉛筆 紙 23.4×16.7cm
サイン：有馬鼓が瀧 明治十三年八月十八日写生 守住勇魚



14. 「下市村吉野川」
1886年
鉛筆 紙 20.2×27.2cm
サイン：十九年八月十二、大和国吉野郡下市村吉野川



13. 「桜」
1885年
鉛筆 紙 25.0×34.8cm
サイン：明治十八年四月廿二日写ス

大阪時代に制作されたと推定される作品



3. 「飛鳥山」
1879～89年頃
鉛筆 紙 22.5×29.6cm
サイン：飛鳥山 I.Morizumi



2. 「安治川ノ景」
1879～89年頃
鉛筆 紙 22.7×28.8cm
サイン：坂府 安治川ノ景 七月六日写真 守住勇魚



1. 「天満橋」
1879～89年頃
水彩 紙 20.6×28.0cm
サイン：天満橋



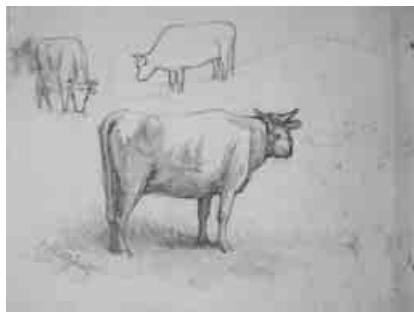
6. 「大阪朝日新聞」
1879～89年頃
水彩 紙 21.8×27.3cm



5. 「新喜多新田」
1879～89年頃
鉛筆 紙 14.4×24.7cm
サイン：若江郡 新喜多新田



4. 「四天王寺」
1879～89年頃
水彩 紙 23.4×32.2cm



8. 「牛」
1879年頃
鉛筆 紙 20.5×28.0cm
サイン：I Morizumi



7. 「風景」
1879～89年頃
水彩 紙 19.2×21.5cm
サイン：大阪府下 I.Morizumi

京都時代に制作された作品



3. 「福寿草」
1910年
水彩 紙 スケッチ帳 14.5×23.0cm
サイン：明、四三、二月十一日 写生



2. 「鮎」
1894年
鉛筆 紙 スケッチ帳 23.0×15.5cm
サイン：明治廿七年 六月廿七日



1. 「キノコ」
1893年
鉛筆 紙 14.9×20.8cm
サイン：明、廿六、十月十二日写



6. 「蝉脱殻」
1913年
鉛筆 紙 スケッチ帳 14.5×23.0cm
サイン：大正二年七月



5. 「白藤」
1913年
鉛筆 紙 スケッチ帳 14.5×23.0cm
サイン：大正二年四月廿三日 写生



4. 「蕨」
1910年
水彩 紙 スケッチ帳
14.5×23.0cm
サイン：四三、五月十三日
写生



7. 「木蓮」
1918年
水彩 紙 スケッチ帳 14.5×23.0cm
サイン：大正戊午四月二日

京都時代に制作されたと推定される作品



1. 「本のある静物」
1889年頃
油彩 紙 21.5×26.5cm

油彩画



3. 「牡丹と木蓮」
明治期
油彩 紙 25.1×34.7cm



2. 「木蓮」
明治期
油彩 紙 25.0×34.7cm



1. 「家のある風景」
明治期
油彩 紙 24.3×32.2cm



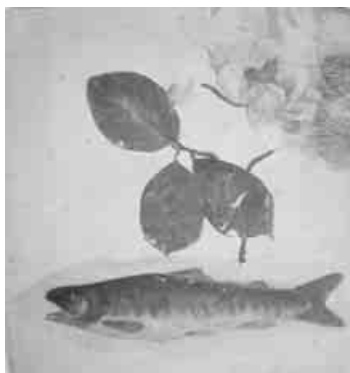
6. 「本のある静物」
1889年頃
油彩 紙 21.5×26.5cm



5. 「薔薇」
明治期
油彩 紙 32.1×24.1cm



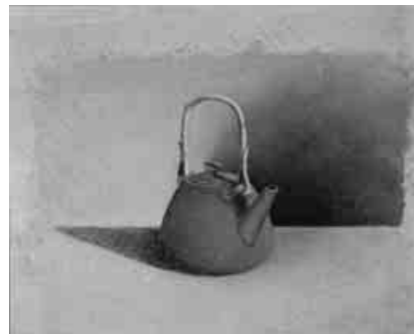
4. 「牡丹」
明治期
油彩 紙 34.7×24.9cm



9. 「薔薇と魚」
明治期
油彩 紙 25.2×23.7cm



8. 「急須と湯呑」
明治期
油彩 紙 26.0×35.5cm



7. 「急須」
明治期
油彩 紙 25.3×31.8cm

contents

The Morizumis Document concerned with Isana Morizumi	3
--	---

Kozo Nakata

Kokki Miyake's Paintings and His Life (1) - from the Birth to the Hisamatsu Primary School Days	32
--	----

Yoshinori Mori

徳島県立近代美術館
研究紀要第12号

発行
2011年3月31日

編集
徳島県立近代美術館
770-8070 徳島市八万町向寺山
文化の森総合公園
telephone : 088-668-1088

印刷
株式会社教育出版センター

この印刷物は非木材紙を
使用しています。

The Bulletin of
The Tokushima
Modern Art Museum No.12

©2011 by
The Tokushima
Modern Art Museum
Bunkanomori-Sogoko-en.
Mukoterayama,
Hachiman-cho,
Tokushima-shi, 770-8070
Japan
telephone : 088-668-1088

printed by Education
Publishing Center

printed in Japan

**Bulletin of
The Tokushima
Modern Art Museum**

No.12